

毛利博物館蔵「源氏物語絵巻」について

龍澤 彩（金城学院大学）

本発表は、毛利博物館蔵「源氏物語絵巻」を取り上げ、伝来、源氏絵の図様継承、および様式の考察を通じて、本作の位置づけを検討するものである。

『源氏物語』全五十四帖を収めた段落式の絵巻で、複数の場面が選ばれた帖があるため、六十五図を含む。全五巻で、第一巻と第五巻の奥書に「入木末葉尊純十六歳書之」とあるため、尊純法親王（1591～1653）の年齢から、慶長十一年（1606）に書写されたと考えられる。『毛利家歴史資料目録』（山口県教育委員会 1983年）で紹介されているほか、近年では「毛利家の至宝 大名文化の精華」（サントリー美術館 2012年）などの展覧会に出品されているが、全図にわたる詳細な検討はなされていない。

本作には、「天英院様御遺物」と記された極書が添えられており、六代将軍徳川家宣の夫人であった天英院（近衛熙子 1666～1741）の所持品として伝えられてきた。今回、明治四年（1871）の毛利家の蔵帳を調査したところ、「石州より捕物」と記載されていることが判明した。慶應二年（1866）の第二次長州征討の折、長州藩が石見国浜田城を陥落させた際に毛利家に入ったものと考えられる。当時の浜田藩主は越智松平家で、その初代の松平清武は、家宣の弟、天英院の義弟にあたる。本作品は天英院ゆかりの品として越智松平家に伝来した可能性が高い。

本作の図様の多くは、浄土寺蔵「源氏物語扇面貼交屏風」などの室町時代の扇面画と共通する場面選択となっているが、異同があり、小画面絵画として流布していた図様を再編して制作された絵巻であると推定される。また、「須磨」帖は光源氏が琴を弾く図様であるが、五節の君が乗る船が描かれるのは珍しく、同様の例としては、土佐光信筆「源氏物語画帖」（ハーバード大学美術館蔵）、住吉如慶筆「源氏物語画帖」（個人蔵）があり、本作が土佐派で継承された図様の系譜上にあることが窺える。様式の面では、土坡や柳などの樹木、屈曲した畦道、建物の表現や構図等において、土佐光茂の「桑実寺縁起絵巻」や「当麻寺縁起絵巻」などと近似する点を見出すことができ、本作が光茂周辺で制作された源氏絵を踏襲していることが推定される。一方で、顔貌表現は土佐光吉の源氏絵に見られる引目鉤鼻とは異なっており、土佐派源氏絵の変遷と表現のバリエーションを示す作例としても注目される。

制作年代が明らかな源氏絵の彩色絵巻は極めて少なく、本作は、17世紀初頭の基準作として、また、16世紀と17世紀の源氏絵を架橋する重要作例として位置付けられる。